大熊町の
学校教育の目指すもの

魅力ある教育活動を展開するために

SDGs を見据えた おおくまの学校教育（おおくまプラン）

大熊町教育委員会
発行 令和２年８月

町の教育理念	温 故 創 新 （先人に学び、新しい文化を紡ぐ教育）
温 故	読書活動、調べる学習、ふるさと教育、心の教育など、これまで取り組んできた教育（おおくまの DNA）を引継ぐ。
創 新	これからの時代に求められる資質・能力を育成できるように、デジタルとアナログを生かし、多様な個に対応した個別最適な学びを保証する。
町の教育目標	愛と英知と活力 ～誇りを持って、自分の未来を切り拓いていく～

大熊町の教育が育む次世代に必要な資質・能力

- 常に好奇心を持って世の中を見る目
- 多様な価値観を受け入れる柔軟性
- 恐れずにチャレンジする意欲
- ちょっとした変化を敏感に感じ取る感性
- 見たこと・感じたことを先取りして形にできる デザイン力

おおくまの学校教育がめざす子どもの姿

誰もが Let's Challenge！
未来をつくる アイ ＆ プライド

「おおくま」を学び、「おおくま」から学び、「おおくま」を創り出す子ども

〔アイ〕は、「愛」と「Eye」（眼識・ものを見る目）と４つの「I」
・「Individual」（個性の発揮）・「Inclusion」（認め合い）
・「Innovation」（新機軸）・「Intelligence」（すぐれた知恵）
を表します。

一人一人の多様性に応じた誰もが学び育つ環境の中で、今までに捉われない新しい工夫や方法を積極的に取り入れ挑戦することにより、自分の資質・能力を伸ばし自分の人生を豊かに、そして幸せにするとともに、世界中のどこにいても何をしていても「学びのふるさと おおくま」に誇り（プライド）を持ち、「おおくまの未来」を考える子どもの姿を目指します。

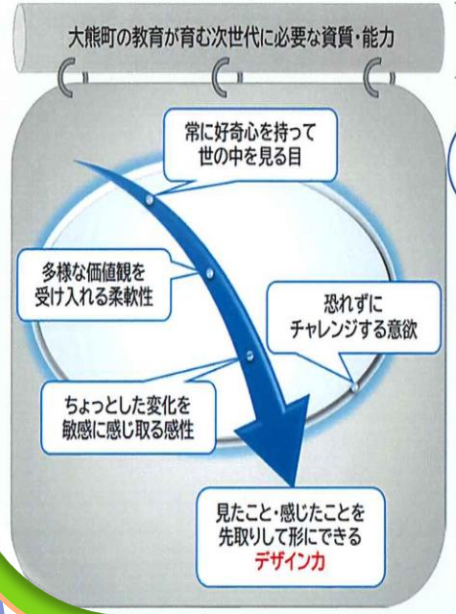
SDGs を見据えた おおくまの学校教育（おおくまプラン）

魅力ある教育活動を展開するために

SDGs を見据えた おおくまの幼児教育（おおくまプラン）

大熊町教育委員会
発行 令和２年８月

町の教育理念	温　故　創　新　（先人に学び、新しい文化を紡ぐ教育）
温　故	絵本の読み聞かせ、意図的かつ計画的な遊び、心の教育、幼小連携など、これまで取り組んできた教育（おおくまの DNA）を引継ぐ。
創　新	これからの時代に求められる資質・能力の基礎を培うことができるように、デジタルとアナログの良さを生かし、多様な個に対応した個別最適な遊びと探究活動の場を保証する。
町の教育目標	愛と英知と活力　～誇りを持って、自分の未来を切り拓いていく～



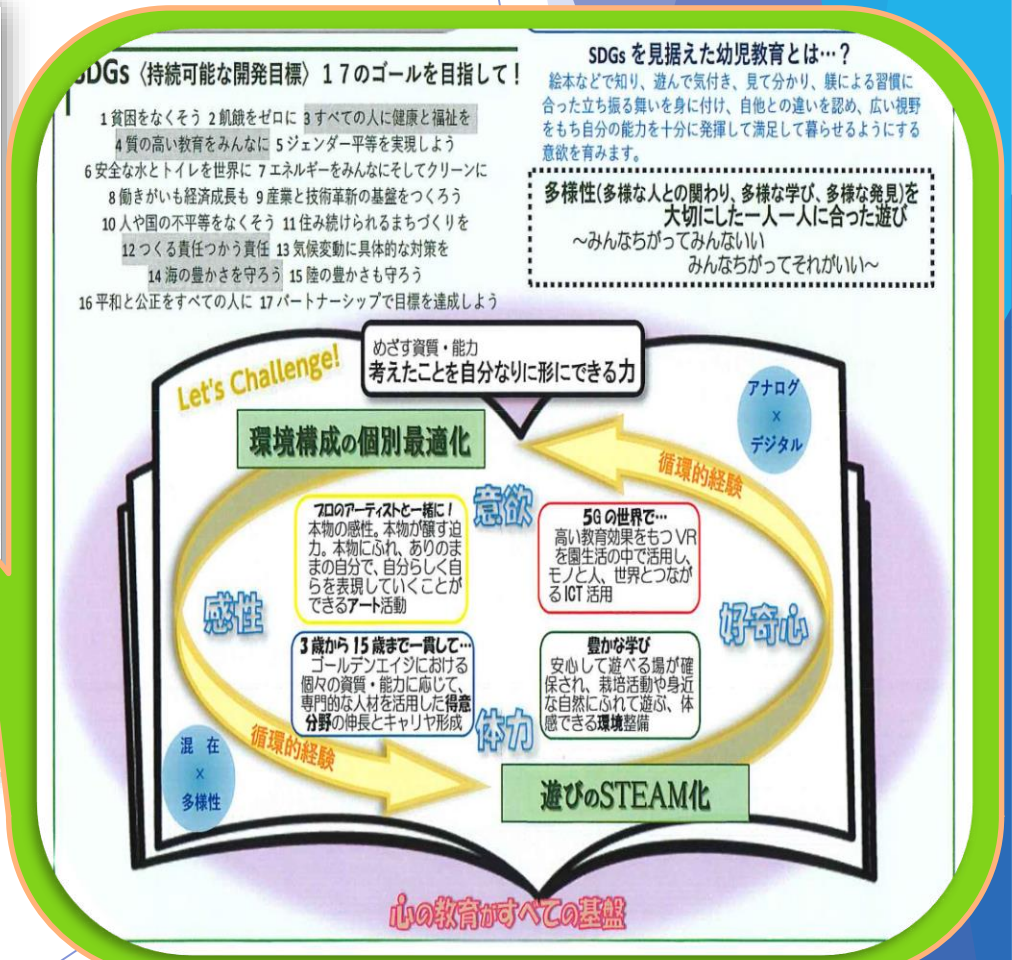
おおくまの幼児教育がめざす子どもの姿

大きく　大きく　大きく育て！

～おおくまで学び、大らかな心と、大胆な発想と行動力で、自分の考えたことを表現できる子ども～

幼児教育では、「多様性」「アナログとデジタル」をキーワードに、一人一人に応じた教師の意図的かつ計画的な関わりの中で、3歳から15歳までの系統的な学びを見通し、幼児がより主体的に遊び込める環境を構築し、一斉保育型から個別最適化の遊びを重視します。

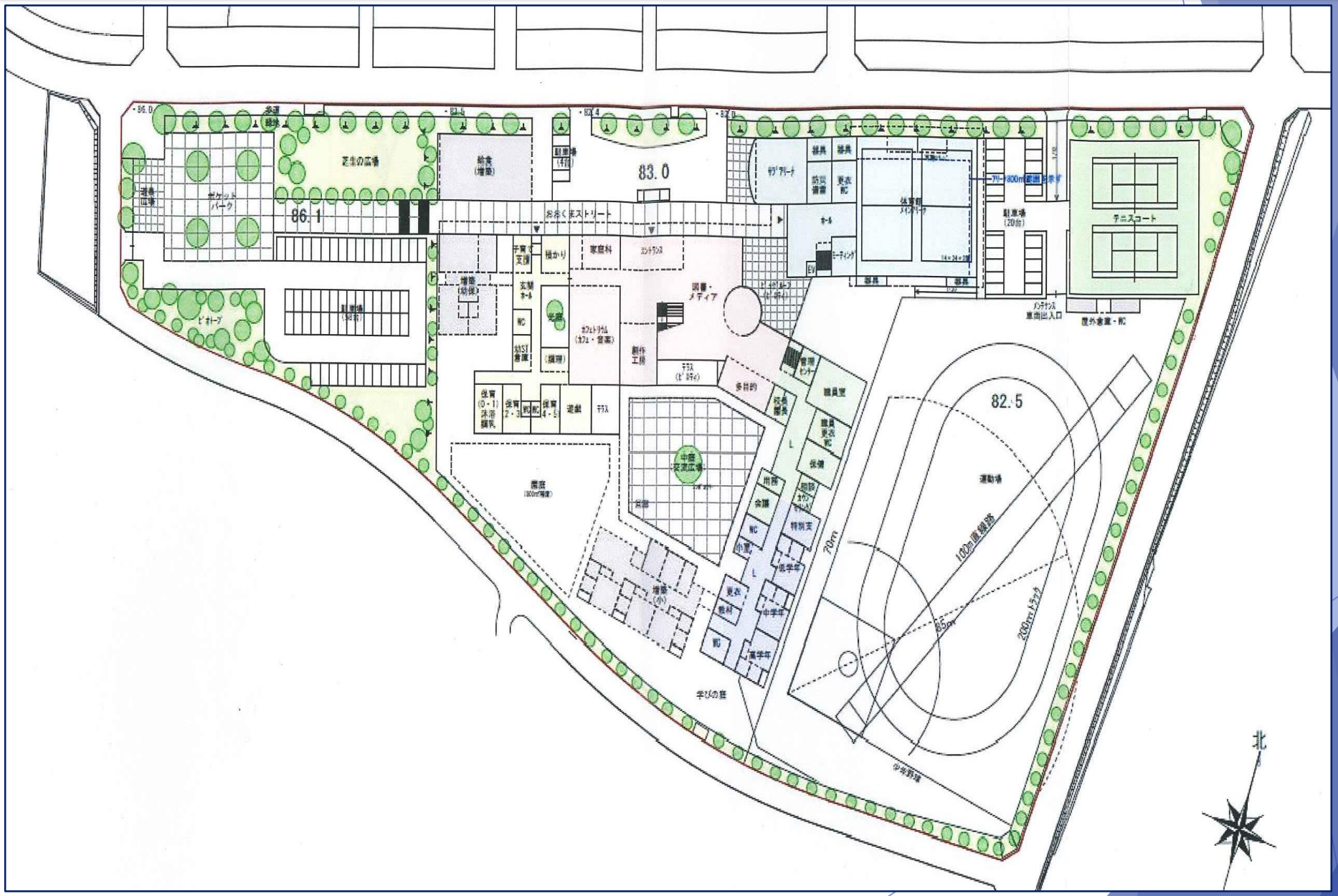
特に、SDGsを見据え、より質の高い教育を子どもたちに提供し、豊かな生きる力の基礎を培い、「おおくま」の学び舎で、自分の力を十分に発揮し、自らの考えを自分なりの方法で表現しながら、友だちと一緒に心身共に大きく育ち合う子どもの姿を目指します。



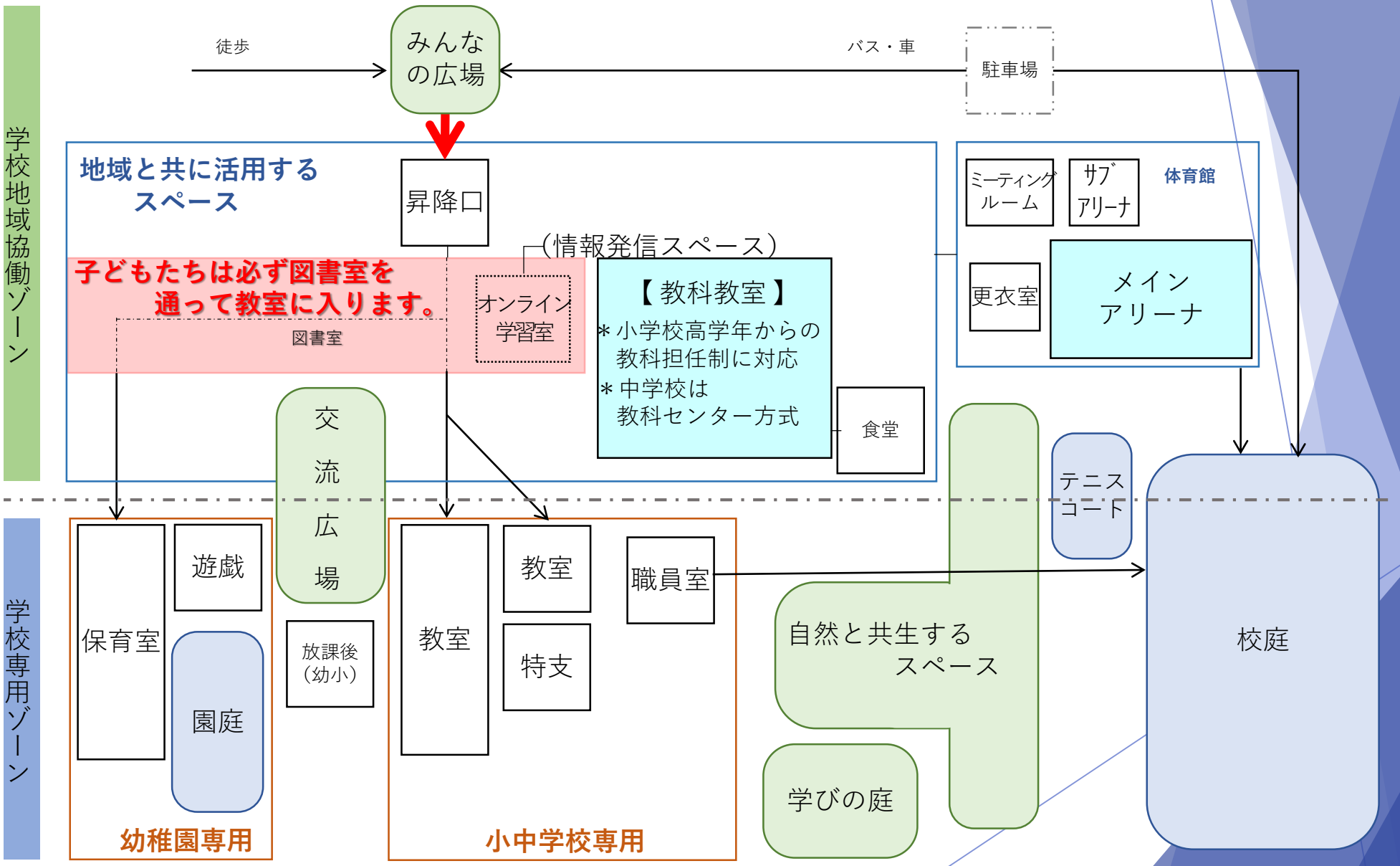
学校建設に向けた
基本構想・基本計画

大熊町大川原復興拠点俯瞰図

基本構想・基本計画段階時の校舎配置のイメージ



施設構成のイメージ


学校地域協働ゾーン
徒歩
みんなの広場
バス・車
駐車場
地域と共に活用するスペース
昇降口
子どもたちは必ず図書室を通って教室に入ります。
図書室
（情報発信スペース）
オンライン学習室
【教科教室】
＊小学校高学年からの教科担任制に対応
＊中学校は教科センター方式
食堂
ミーティングルーム
サブアリーナ
体育館
更衣室
メインアリーナ
交流広場
テニスコート
学校専用ゾーン
保育室
遊戯
園庭
幼稚園専用
放課後（幼小）
教室
教室
特支
職員室
小中学校専用
自然と共生するスペース
学びの庭
校庭

基本設計・実施設計に向けた特定テーマ

【テーマ１】
提案チームの構成と
業務の進め方

【テーマ２】
配置計画と
ランドスケープ

【テーマ３】
施設計画

【テーマ４】
エコスクール

【テーマ５】
実現可能性

【テーマ６】混在と多様性

温故創新の理念のもと、未来を切り拓いていく子ども、先人に学び文化を紡ぐ学校を目指しています。そのためには、教科センター方式の考えを活かしながらも、**「混在と多様性」**を理解した新しい学校施設が必要です。柔軟かつ大胆な提案を求めます。

【 混在とは 】

- **多世代が混在**する（乳児、幼児、児童、生徒に加え、教職員、地域の方々、大熊を応援する様々な方々が混ざって一緒に遊んだり、学んだり、活動したりする空間）
- 発達段階に応じた活動場所が混在する
- **アナログとデジタルが混在**する（実物に触れる、直接体験する、文字や映像として理解する、仮想的に体験する、遠隔での交流など）

【 多様性とは 】

- 年齢、所属や立場を超えて**多様な人と出会う**
- **多様な空間と出会う**（一人で静かに学びに没頭できる場所、みんなで語り合える場所、読書にふける場所、お気に入りの場所、心が落ち着く穏やかな場所、やる気みなぎる場所など）
- **多様な文化と出会う**（書籍、絵画、工芸、音楽、歴史、伝統など）
- **多様な体験と出会う**（ものづくり、栽培、調理、演劇、スポーツなど）
- **多様な学びと出会う**（個別最適化された学び、グループ学習、探究的な学びなど）

個別に最適化された学び

① 教科学習の個別最適化

（主にデジタル）

② 探究学習のSTEAM化

（主にアナログ）

次世代に必要な資質・能力を育む学習の方法

多様性（多様な人との関わり・多様な学びの方法）に対応した**一人一人に最も適した学び**を展開します。

↓

個別最適化された学び

① 大熊町が目指す教科学習の個別最適化

主にデジタル

～ 習得（習熟）・探究の循環的な学び ～

多様性（多様な人との関わり・多様な学びの方法）
に対応した**個別最適化**された学び
〔イエナプラン教育の理念に学ぶ〕

教科学習の個別最適化 ← 循環的な学び

循環的な学び → **探究学習のSTEAM化**

【教科学習の個別最適化】

「一人一人が」
「自分の目標をもとに」
「自分のペースで」
「自分に合った方法で」
「個別に、時に協働的に」
「自分から進んで」
「学習をマネジメントする」

AI を活用し、子どもたち
一人一人の学習進度に
応じたきめ細やかな指導

（確実な習得と習熟）

心の教育が全ての基盤

【探究学習のＳＴＥＡＭ化】

「現代的な諸課題がテーマ」
（SDGs の目標 17 項目に関連）
「各教科の知識・考え方を
統合的に働かせる」
（教科横断的な学習）
「問題解決を試みる」
「ものづくり（本づくり）に取組む」
（デザイン思考の育成）
「新たな価値の創造を
実感し、活用する」
（総称）
||
未来デザインの時間

～ 未来デザインの時間の学習 ～

未来志向の環境教育

〔 学 習 内 容 〕

脱炭素社会
スマートスクール
へ挑戦 !!

「SDGs の目標１７項目に関連付けた内容」

1 貧困をなくそう 2 飢餓をゼロに 3 すべての人に健康と福祉を
4 質の高い教育をみんなに 5 ジェンダー平等を実現しよう
6 安全な水とトイレを世界に 7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに
8 働きがいも経済成長も 9 産業と技術革新の基盤をつくろう 10…

～ 未来デザインの時間の学習の流れ ～

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9
教育課程の区分	前期課程（小学校学習指導要領）						後期課程（中学校学習指導要領）		
教科学習の指導形態	学級担任制						教科担任制		
未来デザインの時間（未来デザイン科）	具体的な活動や体験※見学を含む		テーマに基づく学び方学習			個人による探究的な学習			
指導区分	第1ステージ		第2ステージ			第3ステージ			

～ これまでの充実した取組がベース ～

アナログ × デジタル

読書の町　読み聞かせ → 本の生まれる学校
調べる学習（図書活用＋探究活動）
→ 探究学習の STEAM 化
特別支援教育 → 個別指導計画 個別学習計画
ICT 教育 → 5G・AI など最先端の ICT 教育
英語教育 → 技能教科での英語活用
ふるさと教育 → 大熊 DNA デザイン

混　在 × 多様性

①　大熊町が目指す教科学習の個別最適化

1 授業の進め方

　児童生徒全員が決められた教室・学年の中で、同じねらいのもと、同じ内容を同じペースで一斉に受け身で学ぶ授業から、児童生徒一人一人が自分の目標をもとに、自分のペースで、自分に合った方法で、個別に、時に協働的に、自分から進んで学習をマネジメントする授業へシステムを転換していく。

今後の検討事項（大熊町が目指す教科学習の個別最適化を前提に）

- **教師の個別指導計画の在り方**
- **児童生徒の個別学習計画の在り方**

AI型ドリル教材の活用・効率化の最大化に向けて

→**令和３年３月までに各教科や各学年で実践を積み重ね、具現化していく。**

① 大熊町が目指す教科学習の個別最適化

2 新聞記事の紹介

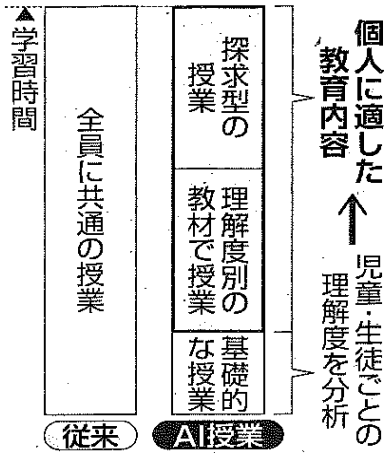
令和2年度8月25日（火）
読売新聞の記事

2020年（令和2年）8月25日（火曜日）読売新聞（9）資料

AI活用 個別学習計画

理解度応じ難問に

政府は人工知能（AI）を使って、全国の小中学校で児童・生徒の理解度に合わせて授業内容を組み替える「個別学習計画」の支援に乗り出す。情報技術（IT）など先端技術を使った教育サービス「EdTech（エドテック）」を、学校現場に導入する足がかりとする。



▲AIを使った個別学習のイメージ

全員が一律で行う授業は基礎学習にとどめ、十分に理解できるまで繰り返し教える。理解が早い児童・生徒は、より難しい問題に取り組めるようにする。政府のエドテックの補助金を活用する。

新型コロナウイルスの感染拡大などで対面の授業に制約があり、ITで最適な学習計画を立てられるようにする狙いもある。教員も理解度を共有し、学力差や学習指導要領で決めている「標準授業時間数」に与える影響などを見極める。

全国に先駆けて福島県大熊町の小中学校で25日から始める。算数・数学の問題を解くのにかかった時間などをAIで分析し、一人ひとりの苦手な問題や得意分野を洗い出す。理解度に応じた教材を使ったり、自分で学習計画を立てたり、自らテーマを決めて課題に取り組んだりする。理解が早い児童・生徒は、上級生の問題を解く。

AIを使った教材は、オンライン教育サービスを手掛ける「COMPASS」（東京都）が提供する。数学や算数は学年ごとに学習内容が決められており、タブレット端末で解答する。AIが十分に理解していないと判断すれば、別の問題が再び配信される仕組みだ。

経済産業省によると、奈良市などがAIを活用して理解度に合わせた個別学習を導入しているが、政府が公立校の授業の組み替えにAIを全面的に活用する支援を行うのは初めてという。

EdTech　最先端技術を使った教育手法で、Education（教育）とTechnology（技術）を組み合わせた造語。児童・生徒の理解度に合わせてAIで教材を作成したり、仮想現実（VR）を使って生物の構造を教えたりすることが想定されている。

① 大熊町が目指す教科学習の個別最適化

2 新聞記事の紹介

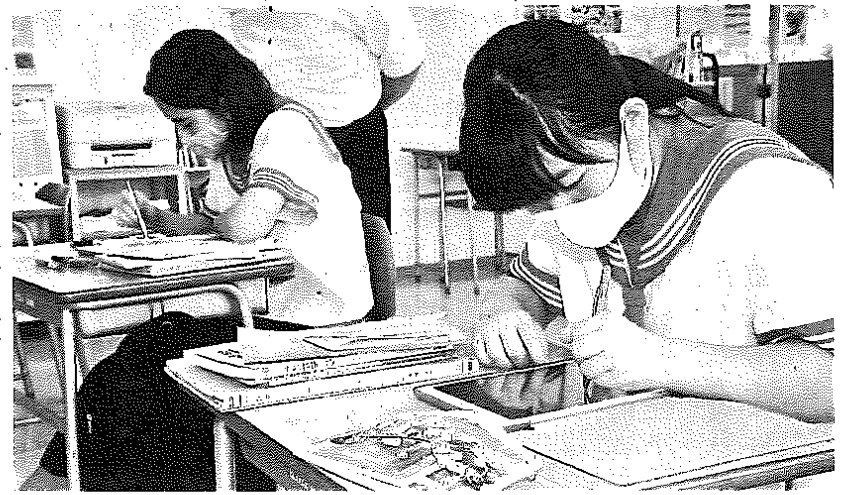
令和2年度8月27日（木）
福島民報の記事

大熊中
数学で使用 授業円滑に

大熊中では数学の時間に生徒がタブレット端末を使って問題を解いた。生徒はそれぞれのペースで課題を進めた。生徒の解答状況や正答率などは担当教員のタブレットに反映され、教員が生徒の理解度を把握できる仕組みとなっている。三年の東理このみさんは「間違えるとヒントや解説が出てきて分かりやすかった」と話した。

熊町、大野両小学校では算数の時間に導入した。

大熊の小中学校 AI活用開始
教員と学習理解度共有



タブレット端末を使って問題を解く大熊中の生徒

東京電力福島第一原発事故の影響で会津若松市に避難している大熊町の熊町、大野両小学校、大熊中で二十六日、AI（人工知能）を活用した授業が始まった。町内大川原地区で二〇二三（令和五）年四月に開校を目指す幼保・小中一貫校での本格導入を見据え、一人一人の学習進度にあった教育を展開する。

大熊中
数学で使用 授業円滑に

大熊中では数学の時間に生徒がタブレット端末を使って問題を解いた。生徒はそれぞれのペースで課題を進めた。生徒の解答状況や正答率などは担当教員のタブレットに反

②　大熊町が目指す探究学習のSTEAM化

主にアナログ

1 未来デザインの時間の概要

＊　ここに掲げる**「デザイン」**とは、大熊町の教育が育む次世代に必要な資質・能力**「見たこと・感じたことを先取りして形にできるデザイン力」**を意味するものである。

1　大熊町の学校教育がめざす子どもの姿の実現に向けた探究的な学習活動の総称である。

2　学習内容を「未来志向の環境教育」との関わりから、**「SDGs」**の目標17項目に関連付けた学びを推進していく。

※　未来に向けた「ひと」「もの」「こと」に関する探究的な学習を進める。

※　未来デザインの時間での学習＝現在の総合的な学習の時間及びふるさと創造学と捉える。

②　大熊町が目指す探究学習のSTEAM化

2 未来デザインの時間のイメージ

児童会・生徒会活動

学校行事

各教科等の学習

学級活動

クラブ活動（小学校）

探究学習のSTEAM化

探究的な学習
「未来をデザインする」
～SDGsの目標17項目を通して～

・図書室の機能（読書・情報・発信）を生かす
・アナログ×デジタル
（直接体験・間接体験の充実）
・ものづくり（本づくり）

【Okuma Arts Project（OAP）】
～本の生まれる学校・本の生まれる町～

デザイン力の育成

② 大熊町が目指す探究学習のSTEAM化

3 未来デザインの時間の9年間の学習の流れ

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9
テーマ	「未来をデザインする」								
	「身近な生活をデザインする」		「おおくまの未来をデザインする」			「私たちの未来をデザインする」			
学習内容	・身近な人々との体験 ・社会及び自然に関わる体験 ・OAP		・SDGsとは ・学び方を学ぶ学習 ・「環境」に関すること ・OAP			・一人１テーマによる課題選択学習 （子どもたち一人一人が選択した学習課題は、大熊町が直面する社会的課題「環境」「社会」「経済」のいずれかに結びつき、これは、環境・社会・経済の諸課題について統合的に解決を図るSDGsに合致する。） 「経済」：農業、労働、産業　他 「社会」：人権、健康、町づくり　他 「環境」：エネルギー、放射線、温暖化　他 ・OAP			
学習方法	具体的な活動や体験 ※幼稚園を含む		テーマに基づく学び方を学ぶ学習			一人一人の探究的な学習			
授業時数の扱い	生活科等		総合的な学習の時間、各教科等						
指導区分	第1ステージ		第2ステージ			第3ステージ			

②　大熊町が目指す探究学習のSTEAM化

4 未来デザインの時間の学習内容

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

～「SDGs」の目標17項目に関連付けた学び～

・一人１テーマによる課題選択学習
（子どもたち一人一人が選択した学習課題は、大熊町が直面する社会的課題「環境」「社会」「経済」のいずれかに結びつき、これは、環境・社会・経済の諸課題について統合的に解決を図るSDGsに合致する。）
「経済」：農業、労働、産業　他
「社会」：人権、健康、町づくり　他
「環境」：エネルギー、放射線、温暖化　他

②　大熊町が目指す探究学習のSTEAM化

5 未来デザインの時間が重視する「ワークショップ」

「住みたい町」の制作

学習内容がSDGsにつながります。

目標 11［持続可能な都市］
包摂的で安全かつ強靭（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する。

「大熊町の9羽の鳥たち」の制作

版画家
蟹江　杏さんとの
ワークショップ!!
制作活動を通して、
創造性を育み、
ものづくりの楽しさを味わいます。

縦2m×横4m
巨大壁画ライブペイント！
一流の音楽家による**ピアノ生演奏**も場をさらに盛り上げました！

② 大熊町が目指す探究学習のSTEAM化

6 「ワークショップ」を紹介する新聞記事

大熊町教委は、画家や写真家、児童文学作家などでつくる「おおくまの教育応援団（仮称）」をつくる方針を固めた。それぞれの専門家が持つアイデアや技術を教育現場に導入し、大熊町独自の少人数教育の特色にしていく狙いだ。木村政文町教育長は「一流の人材に子どもたちが関わることで、将来の可能性を広げることができる」と述べ、町の将来を担う子どもたちの教育環境の充実に意欲を示した。【1面に関連記事】

会津若松市で5日に行われた、版画家の蟹江杏さん（東京都）による「みんなの町を描いてみよう」と題した授業は、教育応援団の活動のモデルケースとして注目された。授業には熊町、大野両小の児童9人が参加し、蟹江さんの指導で理想のまちを思い思いに描いた。

「星を描きたい」「虹色の花火も」。縦2㍍、横4㍍の大きなキャンバスを前に、児童らは想像力を膨らませた。蟹江さんが一人一人の言葉に「いいねえ」と答えると、子どもたちは笑顔を返した。筆を握った手を大きく伸ばしたり、指や手のひらで直接色を重ねたり、体全体を使ってキャンバスに向き合った。

そんな子どもたちに蟹江さんは「絵の具が手についてもいい、小さくまとまらないで」とアドバイスを送った。3時間近くかけて完成した作品に、5年の馬場結梨花さん(10)は「みんなの気持ちがこもっている感じがする」と満足そうな表情を浮かべた。

今年7月から児童に接してきた蟹江さんは「自分の描きたいもの、色、線を表現できるようになった」と子どもたちの変化を語る。さらに、絵や音楽によって育まれる「想像力」が大切だという。「どうして人に優しくしなくてはいけないのか。それは想像力がなければ、分からない」と語り、子どもたちの成長に笑みを浮かべた。

町教委は、蟹江さんらのネットワークを通じて、応援団に参加する専門家などの人選に入る。それぞれの専門家と子どもたちが取り組んだ授業の成果は、本や電子書籍などにまとめ、全国に発信する予定だ。

大熊町の教育を巡っては、2022年4月に、小中9年間で一貫した教育を行う「義務教育学校」を避難先の会津若松市で開設する。翌年4月には、町大川原地区に新設する教育施設に移転する予定になっている。町教委は、「応援団」のアドバイスなどを受けた魅力ある教育カリキュラムを確立することで、一人でも多い児童、生徒の受け入れを目指す。

専門家との授業 書籍化し発信

福島民友 2020年(令和2年)10月6日(火曜日)

芸術が開く大熊の未来

「教育応援団」組織へ

大熊町教委は、画家や写真家、児童文学作家などでつくる「おおくまの教育応援団（仮称）」をつくる方針を固めた。それぞれの専門家が持つアイデアや技術を教育現場に導入し、大熊町独自の少人数教育の特色にしていく狙いだ。木村政文町教育長は「一流の人材に子どもたちが関わることで、将来の可能性を広げることができる」と述べ、町の将来を担う子どもたちの教育環境の充実に意欲を示した。【1面に関連記事】

会津若松市で5日に行われた、版画家の蟹江杏さん（東京都）による「みんなの町を描いてみよう」と題した授業は、教育応援団の活動のモデルケースとして注目された。授業には熊町、大野両小の児童9人が参加し、蟹江さんの指導で理想のまちを思い思いに描いた。

「星を描きたい」「虹色の花火も」。縦2㍍、横4㍍の大きなキャンバスを前に、児童らは想像力を膨らませた。蟹江さんが一人一人の言葉に「いいねえ」と答えると、子どもたちは笑顔を返した。筆を握った手を大きく伸ばしたり、指や手のひらで直接色を重ねたり、体全体を使ってキャンバスに向き合った。

そんな子どもたちに蟹江さんは「絵の具が手についてもいい、小さくまとまらないで」とアドバイスを送った。3時間近くかけて完成した作品に、5年の馬場結梨花さん(10)は「みんなの気持ちがこもっている感じがする」と満足そうな表情を浮かべた。

今年7月から児童に接してきた蟹江さんは「自分の描きたいもの、色、線を表現できるようになった」と子どもたちの変化を語る。さらに、絵や音楽によって育まれる「想像力」が大切だという。「どうして人に優しくしなくてはいけないのか。それは想像力がなければ、分からない」と語り、子どもたちの成長に笑みを浮かべた。

町教委は、蟹江さんらのネットワークを通じて、応援団に参加する専門家などの人選に入る。それぞれの専門家と子どもたちが取り組んだ授業の成果は、本や電子書籍などにまとめ、全国に発信する予定だ。

大熊町の教育を巡っては、2022年4月に、小中9年間で一貫した教育を行う「義務教育学校」を避難先の会津若松市で開設する。翌年4月には、町大川原地区に新設する教育施設に移転する予定になっている。町教委は、「応援団」のアドバイスなどを受けた魅力ある教育カリキュラムを確立することで、一人でも多い児童、生徒の受け入れを目指す。

専門家との授業 書籍化し発信

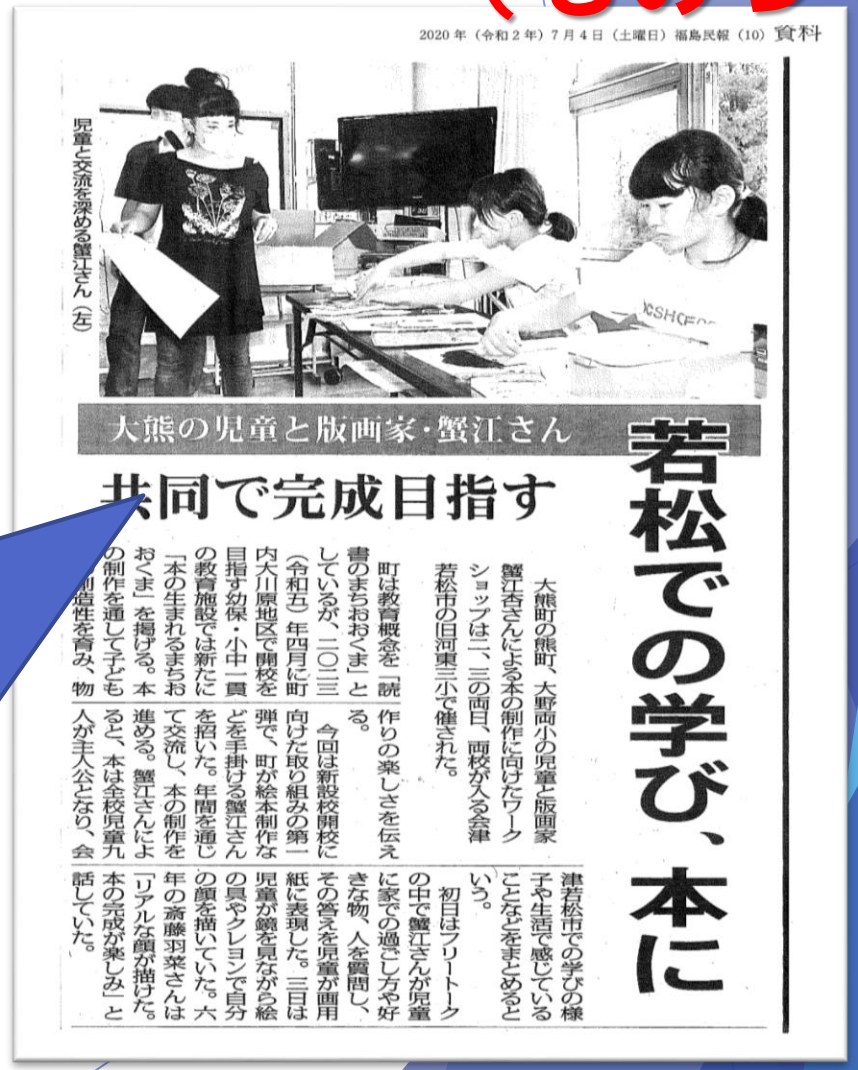
◀ 生き生きとした表情で巨大絵画を描く大熊町の小学生ら

② 大熊町が目指す探究学習のSTEAM化

7 未来デザインの時間の学びが「本」に！そして「出版」へ（ものづくり）

町は教育概念を「読書のまちおおくま」としているが、二〇二三（令和五）年四月に町内大川原地区で開校を目指す幼保・小中一貫の教育施設では新たに「本の生まれるまちおおくま」を掲げる。本の制作を通して子どもらの創造性を育み、物作りの楽しさを伝える。

今回は新設校開校に向けた取り組みの第一弾で、町が絵本制作などを手掛ける蟹江さんを招いた。年間を通じて交流し、本の制作を進める。



2020年（令和2年）7月4日（土曜日）福島民報（10）資料

児童と交流を深める蟹江さん（左）

大熊の児童と版画家・蟹江さん

若松での学び、本に

共同で完成目指す

大熊町の熊町、大野両小の児童と版画家蟹江杏さんによる本の制作に向けたワークショップは二、三の両日、両校が入る会津若松市の旧河東三小で催された。

町は教育概念を「読書のまちおおくま」としているが、二〇二三（令和五）年四月に町内大川原地区で開校を目指す幼保・小中一貫の教育施設では新たに「本の生まれるまちおおくま」を掲げる。本の制作を通して子ども作りの楽しさを伝える。

今回は新設校開校に向けた取り組みの第一弾で、町が絵本制作などを手掛ける蟹江さんを招いた。年間を通じて交流し、本の制作を進める。蟹江さんによると、本は全校児童九人が主人公となり、会津若松市での学びの様子や生活で感じていることなどをまとめるという。

初日はフリートークの中で蟹江さんが児童に家での過ごし方や好きな物、人を質問し、その答えを児童が画用紙に表現した。三日は児童が鏡を見ながら絵の具やクレヨンで自分の顔を描いていた。六年の斎藤羽菜さんは「リアルな顔が描けた。本の完成が楽しみ」と話していた。

② 大熊町が目指す探究学習のSTEAM化

8 未来デザインの時間の学びが「映像記録集」に！（ものづくり）

Life is Techを活用したプログラミング教育

映像作成には生徒自身も参加する。大熊中では今夏、部活動「アーカイ部」を設立し、三人全員が入部した。会津若松市で大熊の学校教育に携わった人物に生徒がインタビューし、その様子も映像に盛り込む予定だ。今

2020年（令和2年）9月5日（土曜日）福島民報（34）資料

会津の思い出記録

大熊中仮設校舎最後の生徒3人「アーカイ部」

撮影されながらウオークラリーをする生徒ら

東京電力福島第一原発事故の影響で会津若松市に避難している大熊町の大熊中で四日、生徒の学習の様子や日常の表情を撮影して記録化する事業が始まった。来年四月以降に解体が決まった現在の仮設校舎の最後の卒業生で、全校生にも当たる三年生三人の姿を追い、会津若松市で学んだ記録として後世に伝える。

町で保存、後世へ伝承

映像作成には生徒自身も参加する。大熊中では今夏、部活動「アーカイ部」を設立し、三人全員が入部した。会津若松市で大熊の学校教育に携わった人物に生徒がインタビューし、その様子も映像に盛り込む予定だ。今年度は卒業記念として二〇一五（平成二十七）年度から始まった会津大短期大学部キャンパスでの桜の植樹など、原発事故から十年目の学校生活の様子を収めていく。

撮影初日、猪苗代町内でウオークラリーが行われ、生徒が町内を巡る様子が撮影された。きょうだいも仮設校舎に通っていたという事理このみさん（三）は「映像は町民だけでなく、大熊を知らない人にも、先輩や自分たちが若松で過ごした日々を知ってもらえる手段になる。楽しい学校生活を記録していきたい」と話した。

町教委は映像を、町内の大川原地区に開校する幼保・小中一貫の教育施設での教育に生かす。町が整備する方針の東日本大震災と原発事故のアーカイブ（記録）施設の資料の一部にもする予定。

同中は原発事故の一カ月後に町役場出張所が置かれた会津若松市の旧会津学鳳高校舎の一隅で学校を再開。二〇一三年四月から現在の会津大短期大学部の隣接地に仮設校舎を建設して移転、授業を続けている。これまでに百三十九人が仮設校舎を卒業した。今年度で建物のリース契約が終了し、来年四月以降に解体作業に入る見通しとなった。新井田宏校長は「生徒三人のアイデアを取り入れながら、仮設校舎で学んだことを誇りに思ってもらえるような記録を残したい」としている。

◇　◇

町教委は二〇二一（令和三）年に旧河東小で小中九年制の義務教育学校を開校するのに伴い、同年三月末に大熊中、熊町、大野両小を休校とする。大熊中の在校生は現在三年生のみで、来春に入学生がいない場合は大熊中のみ一年前倒しして休校とする方針。

震災10年 福島事故 ふくしま